

専念寺通信

十二月号 (NO. 124)

<http://sennenji.s296.xrea.com/>



今年も一年の最後の年、師走がやってまいりました。ふだんはゆったりとかまえている「師」さえも走る、というこの呼び名、みながいつも走り回っているような現代では、かつてほど強い印象を与えない気がします。21世紀ともなると、たとえば、霜月、弥生、神無月のような呼び名が、風情を感じさせ、むしろ印象に残ります。この国に、数字以外の月の呼び名があることは、私たちの心をなごませてくれます。この冬、インフルエンザやノロウイルスの流行も報道されていますが、皆さま、おかわりなくおすごしですか？

☆記憶と忘却

人は歳をとると、何かと忘れっぽくなります。ちょっと置いたメガネの場所が分からなかったり、探し物をしようと部屋に入ったら、別のことをして、探し物自体をすっかり忘れて部屋を出たり、と。若いころには記憶はとても鮮明で、ひとつの出来事がくっきりと心に残ります。悲しいことやつらいことが続いたりして、こんなにも何もかも忘れられないのでは、どうして生きつづけて行けるだろう、と悩んだことがありますか。けれど人生はよくできていて、人間が歳を重ねると、少しずつ、「決して忘れられない」ものはうすまり、消えないまでも、ずいぶん静かなものになっていってくれるのです。私たちには記憶という能力のほかに、忘れるという重要な能力が、天の大きなものから与えられているのだと言えます。問題は、何を記憶し、何を忘却するかをうまくコントロールできないことにあるのかもしれませんが。天からの賜りものとも言えるこの能力を、少しずつ上手に使いえたら、と思います。誰かに貰った恩を忘れずにいて、受けた嫌なことは忘れる、というのは無理でしょうか。難しいけど無理ではありません。いわゆる「善い事」



をすると、その日はなんとなく気分がよいのだという経験をした方は多いと思います。一方で、誰かを傷つけたに違いない言動は、どこか私たちの心を弱らせます。本来、人間はそうのようにできています。嫌なことをした人は、実はそのたびに少しずつ弱っていつているのだ、と思い、つらい出来事も、原則、静かに自分を通過させてやりましょう。

個人的な問題は、それぞれのやり方で、記憶と忘却をうまくコントロールしてしのぐことが可能です。でも、私たちの国の問題、世界の国の問題、となると、いささかややこしいこととなります。私たちが生まれつき持っているはずの、いまお話ししたような、ごく普通のちからがうまく働かない場合が出てくるからです。戦争がそうです。誰もわざわざ人を殺しに行きたくないし、ましてや自分のたいせつな人が殺されるだろう道を選びたくはありません。でも、なんとなく、「やられるかもしれないから何かしたほうがいい」という声に動揺していませんか？過去にしてしまったことをたやすく「忘却」して、盛んに報道される大きな文字の出来事を、そのまま「記憶」することについて、まずちょっと考えてみましょう。いま報道されていることがすべてですか？自分の眼で見ましたか？出来事が大きければ大きいほど、ひとりの人間が真実を確かめることはむずかしくなります。でも不可能ではありません。しっかりと記憶しなければならぬのは何か、自分の身丈にあったかたちで良く考えてみたいと思います。数ヶ月前に毎日のように新聞やテレビを賑わしていた報道がぱったりやんだときに考えましょう。とても大きな声で、世界について話す人がいたら、ちょっと考えましょう。「忘れなさい」と言われても忘れないほうがいいのかと思えたら記憶しましょう。記憶しておくだけでも、いつかそれがちからになります。言葉に出す必要はありません。黙って、考え、静かに記憶しましょう。たとえば、私たちは殺したり殺されたりするために生まれてきたのではないことを。

写真は、しだれ桜の枝先の最後の枯れ葉、中庭の椿、きれいに紅葉したツタの葉、そして墓地の千両です。寒さに向かいます。どうぞ皆さま、お身体を大切に、新しい年をお迎えください。

平成22年12月1日 大黒

